

はまた一緒になった。

日ソ戦での苦闘、シベリア抑留中の苦勞などを折に触れ語り合っているが、氏は戦争の残酷、悲劇を二度と起こしてはならないと、このことを後世に伝えておきたい、との意志も強く、いろいろと文筆の機会を生かしている。今日まで、北海道新聞への投稿で「私の終戦記念日」「抑留者を慰めた『雨のブルース』」など、また、生活協同組合の「明日に語り継ぐ」「私の戦争体験記」への寄稿などがある。また子孫に伝えるものとして「回想、戦中五年十ヶ月」をも執筆されたそうである。「シベリア抑留編」が今回の寄稿文となっている。

倉部さんは昭和二十三年十一月に復員され、漁業協同組合に勤務されて後、同組合の幹部職員を経て、さらに北洋さけます団体役員を勤め、ソ連訪問なども体験している。ありし日のシベリア抑留の因縁を語り合ったりしている。全抑協札幌支部創立（昭和五十六年四月）時の当初より支部役員として活動してこられたが、一方では永年にわたって地元の町内会長として

も地域のために活躍されている立場にもあり、何かと多忙のため、現在では全抑協の役員は辞任している。

しかし会員として種々ご協力を願っているものである。氏はさまざまな人生経験をもとに、地域大衆に根を下ろした組織活動を大切にし、そこから平和社会が築かれて行くと理念を持っている。

（北海道 森 英一）

四年兵が生き抜いたシベリア抑留

茨城県 石橋 實

私は昭和十六年四月二十八日の徴兵検査で甲種合格となり、八月上旬波崎町役場の兵事係より現役兵証書が届けられた。これに北支と書かれており、これを見て戦地へ行けるぞとほくそ笑んだ。

当時、私の家では鉄工所を経営していたのでときどき青年学校へ行くことができた。軍事訓練に行つて鉄砲を持つての殺し方の練習である。当時、日本男子な

れば尽忠報国の念に燃えていた。

昭和十七年二月二十七日波崎町の我が家を出発に際して近所の人たちの万歳の声に送られた。今日出発する隣の篠塚勝男、相馬年雄、山本常吉と合流して手子后神社に向かった。神社に自分たちより早くきていた十名ほどと本殿に上がり祈願した。

町長より送別の辞を受け、篠塚勝男が謝辞を述べた。得意先の篠塚甚蔵さん方の船で利根川を渡って銚子駅へと向かった。切符は在郷軍人の湯浅亀夫さんが買い、ここで兄弟と別れを告げて乗車した。

列車の窓際まで入ってきて歓呼の声で送られた。

同日は東京浅草の若松屋旅館に一泊することにした。私と同級生の藤崎定吉、土子宮治の三人は付添いを残して夜の銀座へと出かけた。

銀座は戦勝気分が強く町は案外明るかった。銀座四丁目で財布を買って三人で旅館に帰った。翌日二月二十八日朝、東京より水戸へと向かって水戸駅に到着、駅前の太平館へ一泊するよう指示があった。

その前に、同行の二人は歩兵なので別れた。太平館

に入ると同級生の守山正己、伊藤茂夫、鴨川梅吉それに波崎町の漁業家で漁師として作業していた根元進、高橋三郎、日向寺酉松がまたまたおりました。

翌三月一日下士官が迎えにきて、説明後点呼があり、お前たちはこれより東部四十二部隊へ入隊するのだから説明された。

下士官の引率で東部四十二部隊の営門をくぐった。そこで叔父と別れた。

兵舎は満員なので被服庫に入る。清潔な倉庫であった。

そこで新兵の中隊別に整列した。二中隊の一班となり、ここで北支派遣河三五六八部隊国有部隊四十一師団工兵四十一連隊第二中隊第一班であることがわかりました。

現地から来た輸送指揮官は大金大尉殿で私たちを北支へ送るため派遣されてきた人は陸軍曹長今田武殿と陸軍軍曹平田猛殿とわかった。

三月一日の昼食は清潔な被服庫で赤飯と尾頭付きの鯛が支給された。この被服庫に一週間毛布を敷いて起

居し、その間家庭の状態を今田曹長殿が調査された。

私の家は当時鉄工所を経営しており、両親と祖母、

叔父夫婦と姉や兄妹がおり、心配はないと答えた。

その間、四種混合の注射を受けたが異常はなかった。

編上靴、脚絆、軍衣上下、水筒、雑のう、兵器等個人

装備を支給された。

三月五日面会日でしたので、両親と最後の別れを惜しんだ。沢山の甘味品や着衣を持って行ってくれと言ったが、両親は上衣とズボンだけを持っていくと言った。毛糸の襦袢袴下は私物として残した。

きょうから戦友となり、自分の故郷のことを語り合った。一時は楽しかった。

隣村の高橋修、桜川村の糸賀敬助の中隊は四班である。初年兵六十五名、出征は日本男子の本懐とするところである。いよいよ北支に向かって出発の日が三月八日日曜日と決まった。

三月八日水戸東部四十二部隊を出発して北支山西省

に向かって営門を出ると、外で整列していた古年兵から丈夫で帰ってこいよと言われた時は誰もが感涙した。

水戸市内を行進中、女学校の生徒多数が日の丸の小旗を振って見送ってくれた。

水戸駅に到着後荷物を積載して乗車し、午前十時頃北支へと出発した。途中東京田端駅で停車して昼食をとる。

そのとき、車両の後方を見たら車両の長いのに驚いた。水戸からは歩兵部隊も同時に出発したと思った。

田端駅から全車両を走らせて外部から見えないようにした。これは防諜のためである。列車は品川駅に到着後兵站給与となり夕食の支給を受ける。

列車のなかでは祖国日本の運命は俺たちの双肩にあるのだ、勇ましく戦って必ず国民の期待にこたえようと語り合った。

翌朝、岐阜駅に到着した。外部は見ることはできないけれど列車内の話題は豊富であった。駅に停車中に朝食を給与された。

今田曹長殿が内地はこれで最後だからと窓を少しあけてくれたので東海道本線と関西地方を見ることができた。大阪を通過するとき窓外を見ると関東よりは景

色がよく見えた。

やがて姫路駅を通過、岡山、尾道と進み、三月九日の夕方広島駅で下車して積載物をおろした。

その後、私たちは和泉屋旅館に宿泊することとなった。今夜は内地の最後の夜だからと今田曹長殿の命令で各班ごとに芸能大会が始まり大いに楽しんだ。サイダーで乾杯した。

翌朝は早く起きて出発準備をした。今日は三月十日陸軍記念日で和泉屋旅館でも赤飯の給与であった。

出発前に今田曹長殿が「昨夜、粗相をした者がいる。

その者は前に出る」と言ったが誰も出なかった。今田曹長殿が上原前へ出る、昨夜寝小便をやったくせにこの野郎と制裁を加えた。この男は群馬県出身でした。

それから宇品港に向かって行進しはじめ、途中通りがかりの人たちも万歳の声で見送ってくれた。

宇品港到着後少し休憩した。間もなく乗船した。船名は私の記憶ではリオデジャネイロ丸と覚えております。

船は夜九時ごろ出航した。甲板に上り瀬戸内海の夜

景を見ていると島にいまにも衝突しそうなときもあった。

船室は狭苦しく段付き寝台なので息苦しかった。今田曹長殿から集合の命令があり、全員に質問があった。これから向かう北支山西省の臨汾というところについて、北支古代史のわかる人はおるかと言った記憶がある。

ここ臨汾には約三千年くらい前に堯帝という王様が政治をつかさどっていて、焼くな、姦すな、殺すなと三つの原則があったと。

それから甲板に上がり瀬戸内海の夜景を見ながら、戦友と語り合ったりして楽しく過ごすことができた。小学校時代の国語の本に「島かと思えば霞であった」という文章があるのを思い出した。

翌日三月十一日、下関港に停泊した。この日は食事当番以外は甲板に登ることはできなかった。

夜十時頃エンジンの振動で出港したことを知った。後は不寝番だけで中には眠れない者もいたようだ。

軍船が接岸したような感じがしたので戦友と甲板に

登って見ると、きょうは三月十二日、余り早く着いたので朝鮮の釜山港かと感じた。

今田曹長殿から、これから上陸するから朝食を早くとれと言われた。上陸する前に今田曹長殿より、ここは朝鮮の港街釜山であると言われた。接岸して、上陸したら珍しいものをみた。

それは朝鮮の女たちは頭に物を乗せて運搬するのである。小学校に到着すると国防婦人会からの湯茶の接待を受けた。その後、待機している間に腹ごなしに相撲を始めた。

今夜は民家に一泊すると一言注意があった。私たちは、今田曹長殿と平田軍曹殿と、戦友は日向寺西松、大里興四郎、大和田新作と私石橋の六名で釜山西町の森脇さん宅に一泊することになった。

この家は看護婦会と塗装業を経営している家でした。二人で各家庭にあいさつと巡察に行くから石橋、お前が責任者になれと言われ陸軍二等兵の私は感動をおぼえた。

私達初年兵は大変ご馳走になり釜山の夜を楽しんだ。

翌日十三日は外へ出ることはできません。

夕方六時ごろ森脇さんにお礼を述べて一路釜山駅へと行進し駅に到着した。

間もなく客車に乗車した。これから朝鮮新義州までが日本の植民地だと思いつつ夜行列車で北上した。

三月十四日昼頃平壤駅に着き、兵站給与で昼食をとった。

途中停車しながら薄暗くなるまでに新義州に近い所で停車した。

夜中に北上を始め、橋を渡る轟音に眠りをさませられた。ガタンコト、ガタンコトと鴨緑江の大河を渡った。

これより満州国安東駅を通過、この付近一帯は大森林地帯に見えた。そして進行していると右に大きな構造物が見えた。これが小学校六年生の時、地理で学習した本溪湖精錬所の高炉である。やがて奉天站到着ここで昼食となる。始めての食事当番を田谷政雄とともに務めました。

奉天から見る南満州の大広野に目を見張った。夕方太陽が降りるとき真っ赤に大地が染まる様子は素晴ら

しかった。

大虎山站を通過し、いよいよ錦州站到着した。そして満州と支那の境の山海関を通過したのは三月十六日の夜で万里の長城の起点となるところだそうです。

朝食後、今田曹長殿より、これからは戦地に入ったので、ここからお前たちは水戸東部四十二部隊より北支那派遣河第三五六八部隊へ転属となったと言われた。この鉄道は漢北交通公司という。この付近は八路軍の襲撃が時々あるので十分注意をするように。

分隊十六名で小銃は八丁程でした。各人に実包が三十発ずつ渡されたときは緊張をおぼえた。

秦皇島、北戴河、開平、だんだんと戦地へと入って行く。沿線付近の民家や街中や風俗や人物を窓外に見ながら珍しさを楽しんだ。

楽県古治へと進み大きな地震のあった唐山に着き昼食になる。

この日は三月十七日。渤海湾の海水は塩分が濃いので塩田が発達していると見えて、盛んに日本の船に使う帆を丸く八本の帆にして海水を汲み上げ、それを沈

積作用によって集積して工場に送るのが見えた。

塩田の間を進行して塘沽站に着く。後は天津、豊台で始めて支那人の捕虜を見た。

夕方のことでした。翌三月十八日に永定河を渡った。ここは水戸歩兵石黒部隊と水戸工兵岩倉部隊との奮戦地であった。

京漢線でこれから、保定、靈石と進み、石門に着く。旧地名は石家荘站である。しばらく休憩をして汚物の整理などをした。

ここを出発するば山西省の大原と河北省の石家荘を結ぶ石太線となり、やがて井陘岩鉞站に着く。ここはかつて昭和十五年八月に八路軍が炭鉞を攻撃の目標として大攻勢を仕掛けてきたところである。炭鉞の重点攻撃により近くの日本軍は不意を突かれたうえに、圧倒的に優勢な八路軍の襲撃によって全滅したところであった。

ここを出発して到着したところは河北省と山西省の境で峻険なる山地であった。ここで初めて万里の長城を見た。列車が走っているところより見ると、高さ二

百メートルくらいに見えた。国境のトンネルはあららしく、途中鯉登りの滝を見た。下を見ると、珍しく水がきれいであった。ここは鯉登部隊の奮戦したところであった。

山西省に入って初めて娘子関に着く。次に榆次に着く。ここは閻錫山將軍のモンロー主義によって鉄道は狭軌となるので積載物は積みかえると司令官より聞く。列車は榆次に着いた。

三月十八日の夜であった。兵站宿舎へと入ると、ここで一泊し、翌十九日は休養と河三五六八部隊に入隊する準備に追われていたが、午後になって酒保が開かれていると聞いて行ったところ、隣家の篠塚勝男君と会った。彼はいづれ河三五六四部隊に入隊するとのことでした。元気で軍務に務めようと誓い合った。

翌日三月二十日の朝早く榆次站に向かう。兵器弾薬を積載して乗車し乗り心地はよかったが、臨汾に近くにつれ緊張感がみなぎった。まもなく臨汾站に着く。下車してから積載物の荷下ろし、この鉄道は同浦線といいました。出迎えの下士官と班付上等兵に初年

兵の代表が挨拶をした後、国防婦人会の茶の湯の接待を受けた。間もなく夕暮れになり今田曹長殿の指揮により北支那派遣河三五六八部隊の営門をくぐり二中隊の初年兵だけの兵舎に入る。二中隊第一内務班員となる。室内には電灯はついているがろうそくを使わないと明るくならないのに二度吃驚した。こんな環境で何年も暮らすのかと思った。これが野戦部隊の状態なのだと感じた。

昭和十六年十二月八日アメリカ・イギリスに対して宣戦を布告して開戦、劈頭日本軍は真珠湾のアメリカ太平洋艦隊を奇襲攻撃、マーレ沖海戦でイギリスの誇る二大戦艦を撃沈し、同時に香港を攻略した。

それに支那大陸では支那派遣軍は日夜作戦に警備に頑張っているのも私も派遣軍の一員として尽忠報国の念に燃えた。勝利のために頑張ると自分なりに誓った。三月二十日夕食後内務班長は松下繁軍曹殿とわかり、その他班付上等兵は小松房夫、原弥之助、二名と決ま

る。
翌日第二中隊の中隊長陸軍中尉長谷清一殿と教官陸

軍中尉佐々木茂雄殿と中隊長幹部等の訓辞があり、一期の軍事教育が始まった。朝の点呼三十分前毎朝市街を駆けると塵埃がひどく衛生的に非常に悪いと思った。

まず訓練は駆け足からとっていたので、朝食の支度と演習の準備に追われる毎日でした。五日ほどしてから小銃の授与式により各人小銃を受け取り、これから本格的で厳しい演習が始まった。戦争に勝つためには当然と思いますが仕方ないことと思うようになった。

四月五日になると西はレンジ山脈と東は太行山脈で臨汾県は盆地なので非常に暑苦しかった。

昭和十七年ころの寒暖計は華氏なので百二十度のところにも赤線があった。それを上回る百四十度ほどに上がるので苦しかった。さらに水が悪く硬水といわれる水だそうです。飲むとはげしい下痢になる、洗濯にも困った水でした。

六九師団と交代となつてから給与が悪くなり、毎日が醬油汁、それに毎日の酷暑の中の演習である。隠れて水を飲んだものは半日もたつと下痢をおこす、その中で私は下痢をしなかった。下痢患者が増えた。尽忠

報国の念はどこへやら、中隊長殿の精神訓話によれば、敵の將軍閻錫山は部隊長佐々木庄助中佐殿とは日本の士官学校で留学同期であった。その関係で局地協定により閻錫山の山西軍とは戦闘はやらないということであった。

午前七時起床、服装を整え、寝具をたたみ宮庭に整列して朝の点呼を受け、八時朝食、八時三十分より演習、終了後は兵器の手入れ、洗濯など、五時入浴、六時夕食、その後の自習は軍人勸諭など、八時日夕点呼後、班長の訓示や助手の指導と注意、九時より不寝番勤務がある。それに連隊本部と二中隊は冀中作戦をしながら山東省の徳県に進出の予定なので本部と中隊の荷物の梱包が毎日行われ、大変な作業であった。

そんなある日、臨汾の南門を出た。行き先は堯帝廟である。ここは空海が長安の修業が終わり帰途臨汾の堯帝廟に立ち寄り、そのとき空海が書いた物があると聞いた。

教官佐々木中尉殿は徳島出身の人なので特に関心があったと思う。帰隊するとき銃撃を受けたが事故は

なかった。教官の弾込の命令で全員が緊張したが、無事に帰隊することができた。

そのころ、私と寝小便をやった上原勇と二人で舎内当番についた。六月二十四日、給手の悪い勝六十九師団工兵隊と交代して臨汾を去ることとなった。営門を出るとき、ここで一期の教育を受けたなつかしさがこみ上げてきた。

臨汾住民が見守る中を行進して行く。このとき私は舎内当番で、移動しながらも身嗜みとして背囊に洗面器をつけて臨汾站に向かった。既に歩兵河三五六四部隊員が集結しており、その一人に私の従兄弟の河野文造のことを聞こうと思って話しかけたけれども、中隊が違うのでわからなかった。

午後三時ころ乗車する直前の小休止のとき、付近を見ると、街を歩く娘、それに四十歳以上と思われる女性には皆といってもよいほど纏足である。これは女性の習慣と思われた。

薄暗くなってから貨車に乗車し、一路山東省徳県に向かつて出発した。本隊も冀中作戦にて戦闘しながら

徳県に向かう予定でした。

私たち初年兵だけで古年兵はいなかった。佐々木教官の指揮で三月に臨汾に向かった鉄道を逆方向に進行し、井陘炭鉱站や石家荘站に到着した。ここからは石徳線となるこの鉄道は、日本軍と現住民の協力によってできた鉄道でした。

建設には多大の資金と犠牲が払われたと聞いている。途中に站としては東鹿站と桑園站を過ぎて山東省徳県站に到着。

先に書いた河野文造はニューギニアで米軍機による爆撃で戦死した。余談になるが文造とは北支にいます。私は城内に文造は城外にいた。部隊名は河三五六四部隊奈良部隊という。

私たちは積載物をおろし徳県の赤煉瓦の兵舎に向かう。ここは臨汾の兵舎より教段上の設備で内地の兵舎と同じにつくられている。冀中作戦に参加した中隊本部主力も到着していた。

これから一期の検閲を受ける。部隊長佐々木中佐殿の立会いで思い出となる四時間の連続土工の検閲が始

まり、途中十五分間の休憩であったがよく務まったと思う。松下軍曹殿は心配してくれた。

漕舟演習は艀を使って兵舎の裏の大運河で検閲を受けた。鉄舟を艀を使って漕ぐ訓練であった。

検閲で一番の思い出は、黄色葉を使って爆発させることである。部隊長の前で検閲が始まり、私の黄色葉だけが爆発しなかったので私は顔面が蒼白になるのがわかった。

今夜の点呼後は私的制裁を受けると観念した。だが部隊長の命令で教官佐々木中尉殿が点火したが、やはり爆発しなかったので、私は胸をなでおろした。

軍隊というところは失敗すれば殴る悪い習慣があるので、私達初年兵は班付やその他の古年兵にも気をつけねばならない。

北支では春先から毎日のように黄塵万丈の風が吹いて兵器や被服も顔も真っ黒になってしまう。手入れも容易でなかった。

一期の検閲が終わりに近づくころになって背中と胸に痛みを強く感ずるようになった。食欲も減り、その

後医務室のお世話になるようになった。しばらく医務室に入室していたが、よくならなかった。陸軍軍医中尉勝見寛一殿の命令で徳県野戦病院に入院しろと言われ八月二十七日入院する。

野戦病院は徳県の郊外にあって、山西省から山東省に移動したばかりで病室といっても天幕の病室で地面に寝台があって、寝台にいいのはよい方である。粗末な室内、野戦病院とはこのようなものかと思った。

内務班長白禾忠軍曹が入院しているのであいさつをしにいった。ある日、突然独歩患者集合という命令がかかり火葬所へと行く。薪の上に乗せてある死者に全員合掌し、野戦で初めて死者を見た。本人もさぞや無念と思われる。

私たちは天津陸軍病院に転送ということに決まり、徳県に着くと、出発前に師団長陸軍中将阿部平助閣下の見送りの言葉をいただき感激した。

天津陸軍病院に一月ほど入院して、その間に厳密なる検査を受けた。天津陸軍病院は、固有名を北支派遣甲一八二九部隊という。

これから行く河北省北戴河陸軍病院は天津の分院である。ここ北戴河は各国の大使館及び公使館員の家族の別荘が数多くある。胸部患者にとって空気と環境がよく療養に適しているところでした。

私は病院の方針に従って、療養に務め一日も早く治療し退院し、軍務に精励したいと思ったのだが思うようにはいかず、半年が過ぎてしまった。

そのうち、四一師団が南海派遣軍としてニューギニア方面に行くと聞き、私も一緒に参加したいと思った。無理と思ったが陸軍軍医中尉横関努殿に退院させてくださいとお願いを申し上げましたら、訓練隊へ行けと言われて群馬県出身の岡田成夫と二人で訓練隊に行った。

昼間は戦闘各個訓練に励み、また入隊後初めて病院の衛兵勤務についた。衛兵全員訓練隊といってもまだ患者で二十四時間勤務につくわけである。

一日も早く帰隊したいために無理をしても思っていると、衛兵の内容は、司令が伍長か兵長で、上等兵の歩哨係が一人で一人は控といって椅子に腰をおろし

ている。

私は初年兵なので歩哨で控を一時間づつ交代でやり、二十四時間夜間は動哨で雪が積もっている火葬所まで動哨した。

ある日、横関中尉殿の指揮で、北戴河の別荘地帯より約三キロほど、軽装とはいえ駆け足をした。

病院に着くと同時に熱が出まして、直ちに病室入り検温すると三十八度五分で苦しかった。横関中尉殿が来てくれた。三日ほどしてから血痰を吐くようになり熱が下がらないので特別室に入室した。この病室は死病棟というそうだ。

横関中尉殿は試しとして、気胸という治療をやってみよと言われた。肺と横隔膜の間に空気を注入する治療法で、一回目でやや血痰が少なくなり、三回やって十八日目でやっと血痰は止まったが、この十八日間は寝台にいても苦しかった。

南海派遣軍でニューギニアに上陸し戦闘をした私の部隊は全滅したと聞き、私は参加しなくて申し訳ないと思っている。

私は昭和十八年七月站北載河にいたのです。私たち河部隊の残留組は退院したら北支派遣衣四二九八部隊へ集合して衣部隊の各部隊にいる兵や下士官とともに内地の部隊へ転属するものと思っていた。

早く集合した兵と下士官は内地の部隊へ転属ができたが、遅い者は各隊の兵員として衣部隊に全員が転属となり、五九師団の戦列に加えられた。

私が勤務した衣四二九八部隊は一個中隊で部隊長は陸軍大尉大原芳一殿でした。丙装備で兵器もよいものはなかった。

この部隊へ来てからすぐ衛兵勤務につく。小銃も受領していないのに衛兵とは思った。

衣部隊の歩兵隊は八路軍の討伐専門の師団である。

ここは山東省済南の一つ、さきの白馬山である。建物は衛兵所、弾薬庫、兵舎四、炊事場、酒保、馬舎等である。

一個の兵舎で部隊本部と事務所とがあり、人員は約百八十名くらいで作業と警備が任務である。

私が衣四二九八部隊へ行ったときは、部隊長大原大

尉殿は第三次河南作戦に参加中であつたので申告しなかつた。衛兵を下番してきたら、将校当番だということとで、すぐ山本上等兵と交代した。平野伝吉中尉殿と酒田静夫少尉殿は二人同室だろうと思った。留守部隊長は平野中尉殿で、人事係は竹野谷留吉准尉殿で酒田少尉は初年兵の教官で、助教は荻野椿吾軍曹殿である。昼食は将校集会所でとるので、毎日、その準備を神奈川県出身の富岡一等兵とともにした。

この兵営は建物の外に師団司令部の燃料を預かつていたので衛兵勤務者も私たちも大変な務めであつたが、これが軍隊なのかと思えば我慢もできた。

それから間もなく酒田少尉殿が転属になるまでこの任務は続いた。

そのうちに、身体の調子が悪くなり、朝の点呼のとき、診断の申込みをして診察を受けることにした。医務室で軍医中尉木内堅郎殿の診察を受けた。軍医殿は私が入院中に血痰を吐いたことを知っていたので、入院はしたくないだろうと言ってくれたので、特別入室となつた。

毎日注射をしてくれ、目も悪くなり治療をしてくれた。本来、入室は三日とされているが、目に膜がかかり、軍医殿は師団司令部に眼科専門の軍医殿がいるからと言ひ、師団司令部医務室に入室した。

検査の結果は目の膜とわかり、硝酸銀を使って取り除くことができたけれど、約一週間くらい入室した。

部隊へ帰ってから入院したほうがよいと言われ、師団司令部を退出した。それから、濟南陸軍病院に入院し、四十五日くらいの治療をしていただきましたが、目のくもりはとれなかった。現在もそのままである。

退院後、警備や衛兵当番や作業などでいつしか昭和十九年十月の末となった。

私は退院したらずぐに部隊長大原芳一大尉殿に申告に行った。そのとき、お前は家が鉄工所だそうだが、鍛造はできるかと聞かれた。家では火造といひます。

少々なればできると答えた。石工兵の命令が出ていると聞かされた。それから毎日石工作業が始まり兵舎の近くの白馬山には蘆山という山があって、そこで石工作業をした。

そのうち、雪が降り始め、雪中の石工作業も楽しかった。雪の中で焚き火は実に楽しかった。薪は初年兵が準備した。

石工班長は神奈川県出身の福田徳一兵長で、指導を受ける兵は私と馬場秀雄、木津繁喜、波富次、もう一人は千葉県出身で菊次と聞いた記憶がある。

その当時、濟南郊外に新樹山という山があり、近いうちに行くこと決まっていた。

昭和二十年一月元旦となって、この日、私は濟南旅団司令部へ命令受領に、同年兵の佐藤源は師団司令部へ行き、帰隊は一緒になった。本部に命令書を渡した。昼食は元旦の祝いで、尾頭付きと珍味の御馳走が出された。皆、酒に酔い各々が芸を披露してきょうは無礼講で大いに楽しんだ。

その後、新樹山に行き、洞穴を掘りながら石工教育に励んでいた。

部隊長が交代して名前は陸軍少佐桑原實殿で、四国の丸亀より転属してきた人である。石工兵は福田兵長の指揮により石工の検閲を受けた。全員合格でした。

それから石工兵五名で単独作業となり、このとき人員不足であったので洛陽の捕虜十名を使役とすることになった。彼らに八路軍という腹をたてるほど誇り高き蔣介石軍の軍人と思っていた。思い出として昭和二十年二月十日の夜中に、捕虜が脱走したとの本部に通知があり、石工兵も捜索隊に加わり、ガス燈を持って捜索した。隣の部落まで探したが見つからなかった。翌日、二月十一日は紀元節で、衛兵だけを残して済南へ外出した。街には軍管理の慰安所星俱樂部の軍人ホーム等があった。帰隊は全員で洋車で帰った。

ダイナマイトは、なめると渋い甘さがあるが、なかなかの暴れん坊である。あるとき、装填したダイナマイトが不発となった。そのときは十五分くらい待って確認するのである。ところが、一步洞穴内に入ったと思ったら突然爆発したので吃驚した。一步前に爆発していたら死傷者が出たであろうと思った。

それからは雷管と導火索との結合には十分に気をつけた。そして作業を続けていた時大きな作戦があると噂が出た。

四川省の昆明あたりと聞き、私物の毛糸の襦袢袴上下一組とセーターを支那人に八百円で譲った。私たちが兵隊にとつては八百円は大金なので吃驚した。私の給料の二十五倍である。この金で皆に御馳走し、一夜楽しく過ごした。残りの金は大事にした。ある日、山上部隊本部のある白馬山の方面を工事用の水準器で見えたら、津浦線上を蒸気機関車が四十両の貨車を引いて行くのが見えた。部隊の移動と思われた。それを見て戦列は拡大しているのだと思った。

そうしているとき、平野中尉殿以下全員に新樹山を下山せよとの命令があり、全員が帰隊した。部隊長の訓話によれば、平野中尉殿以下百名で構成して、あとの転属してきた輜重兵二十五名は河南省方面の戦列に入るため完全軍装の準備をした。

部隊長殿に特別外出を上申して、最後の許可をいただき、全員で外出した。留守をする者との別れである。昭和二十年三月二日、平野中尉殿の指揮により白馬山の営門を出る。白馬山駅に向かって行進白馬山に到着して貨物を積載して発車を待った。輜重兵たちの馬を

飼う苦労も大変なものだと思った。

夜になって、一路北上を目指して発車した。恐らく徳県をめざすのだろう。

貨車にはゴザと毛布を敷き、中には中隊長平野伝吉殿、指揮班長鈴木史行伍長、第一小隊長高橋少尉殿がいた。

私は第一小隊の第一分隊は十七名くらいと思っていた。分隊長は山梨県出身の荻野精吾軍曹殿で石門站より京漢線を南下し、障徳飛行場のある邯鄲站に着いた。昼食は邯鄲站でとり、間もなく開封站に着いた。

これから黄河の鉄橋を渡るのである。鉄橋の長さは三千八百メートルである。長い橋を渡って作戦地に近づく。「えんじょ」とわかっているが、字がわからない。

三月七日の朝、下車し貨物をおろして集合地に向かった。各班で酒食をするのはこれが最後だと思った。私は支那酒を買いに出て、約三升ほどを集めた。班長荻野精吾殿は大分酔っていた。

歩哨以外の者は翌朝点呼を受け、指揮店に集合し、

そこで宿泊することとなり、そのあたりを警備した。

十一日の朝の点呼のときに東京が大空襲を受けたと聞き、支那においても情勢は厳しくなってきたと思っ

た。今度の作戦は南陽と老家口とわかり、十一日朝、作戦により指揮店を出発した。行軍に続く行軍で休む間もなかった。

我が中隊は築城と橋梁と道路などの補修が目的の中隊であり、私は井戸掘りの鈴木部隊に配属となって苦労した。

そんなある日、指揮班にいたときのことです。徴発から帰った戦友が男を連れてきた。人の家をのぞいていたのでスパイだと思い、それで臨時に兵舎内の木に縛った。昼食が済んだら斬るんだと言っている。これが支那人にわかったら、当方は十人くらいなので夜襲でも受けたら全滅するだろうと思ったので、縛ってある綱を緩めて早く逃げると言う、兵名前と言ったが、名前は書わなかった。自分なりに納得した。

四月になって、三十里屯に流れる白川に長さ約九十

メートルの橋梁を三日二晩で完成させた。ここは南陽を攻撃するには重要な橋梁である。そのうち戦車や自動車等が渡ったのだがたがたになったと橋梁衛兵より通報を受けた。

前日より蒋介石指揮下の五十八集軍が南陽から方城までの日本軍を全滅させると豪語した放送があったので、その晩は軍装したままごろ寝して朝を迎えた。南陽も方城も河南省である。四月十四日、高橋少尉殿の指揮により支那人の牛車三台で器材を積載して全員三十三名（一分隊長荻野精吾軍曹、第二分隊長小菅四郎伍長、甲種幹部候補生二名、乙種幹部候補生二名、兵二十三名）で朝早く出発した。

途中の部落では、四方に壕が掘ってあるので気味が悪かった。ここで昼食にしようという命令で準備をしている間に部落内を調査したら煙草と白酒四斗くらい入る甕を三個見つけた。煙草は山のように積みあげてあったので危険を感じたが、これは敵の兵站基地だと思った。

白酒を飲んで酔っている者がいたが、早く出発すれ

ばよいと思っていると前方を駆けていく青い服を着た敵兵が我が小隊を包囲してしまった。

四百か五百の敵に対して我が方は小銃二十八丁で弾丸二千五百発と手榴弾三十発では長く戦うことはできない。高橋少尉殿から三十里屯に行くよう命令が出たが、誰も行かなかった。

私は戦闘中命令を務めたが戦場は広がったので命令は徹底しなかった。それに私は三十里屯に一人で行こうと思つて走ると敵兵の一人と接触しそうになった。

私気がついたので一対一の決戦となり二分くらい撃ち合った。敵は味方呼んで六名となり、勝ち目はないから捕虜になるよりは日本の軍人として自爆しようと思つた。手榴弾を発火しようとしたら大砲の音が二発した。それで敵は引き揚げたので自爆せずに済んだ。

全員がばらばらになった。私はそれから一人で三日二晩かかって三十里屯に着いた。駐蒙軍の橋梁衛兵指令である三宅伍長殿が大声で早く渡ってこいといっているのが聞こえた。

本部へ着いたら少尉殿がおりましたので戦場の報告をした。我が小隊は戦場で分散していたので命令が徹底せず三十里屯へは行かなかった。無理もないと思う。駐蒙軍の梶田少佐殿に報告をした。それから一週間目に平野中隊長が戦聞のあった金子店付近の戦場掃除にきた。千葉県出身の石井兵長が梶田大隊にいたので私も一緒に一週間ぶりに帰隊した。そして平野中隊長殿に戦場のことについて詳しく報告した。荻野精吾軍曹殿と小菅四郎伍長と佐藤源上等兵は戦死。佐藤上等兵と池田一等兵と私と三人で敵に向かって突撃を三回繰り返した。

佐藤上等兵は心臓に一発。ああと言っただけ。三名は山梨県出身でした。そのほかに甲種幹部候補生二名と乙種幹部候補生二名とも戦死、そのほか八名戦死者を出す大激戦であった。

報告が終わったとき、石橋お前は今度の作戦では一番手柄だと言われたときはうれしかった。軍隊に入っ
て初めて感涙とはこれだと思った。

その後は河南省如汾真で架橋作業にかり昼夜交代

で励んだ。交代のとき、近くの部落に徴発にいった。民家に一人の老人がいて三人で同時に老人と言ったら日本語でしゃべり出したので驚いた。老人は朝鮮の仁川にいたことがあると答えた。

架橋も途中で帰隊することになり、夜行軍で輜重兵と馬とともに許昌へ夕方到着した。民家などで一夜を明かし、翌朝は早く許昌站にて貨物を積載して一路白馬山に向かった。

京漢線を北上して黄河を渡り、開封に着く。次は蜀海線で東に進み、貨車は麦畑の中を走る。徐州徐州と人馬は進むの唄を思い出し、まもなく徐州站に着く。ここで昼食をとる。

次は津浦線を北上し、途中泰安站に着く。前の山は靈山で有名な泰山である。泰山は諺でも有名な山であるらしい。間もなく白馬山に到着。

出迎えの下士官、兵に貨物を預けて下車し、英靈を先頭に営門に入る。出迎えの下士官、兵が整列してくれてありがとうという。

帰隊したら約千名の部隊に編成されていた。第一小

隊は新編成の第一中隊となった。兵舎には知らない兵、下士官がいた。ご苦勞さまの声が轟いた。

第一中隊長は平野中尉殿、第二中隊長山下少尉殿、第三中隊長川手少尉殿となった。高橋少尉殿は大隊副官となった。

このころは六月の下旬で師団全体の移動がある。各部隊も警備地区の交代を急いでおり、本土決戦のため内地に移動するという噂が広がった。器材の梱包はできているので積載を待つだけである。

七月に入ってから急に多忙となり兵舎の交代などで北支那派遣衣第四二九八部隊は移動することとなった。

七月十七日昼過ぎに本部前に本部の副官を始め、本部の全員、一中隊、二中隊、三中隊全員が整列した。部隊長桑原少佐殿の訓辭によれば移動演習だということである。

間もなく本部を先頭に白馬山站に向かって出発。各中隊長の指揮によって営門を出る。

白馬山に着くと、すぐに貨車にゴザを敷き上に毛布を敷く。乗車し装具を解く。兵舎の方を見れば私は一

年半くらいだが、懐かしい。

薄暗くなってから発車した。噂によれば内地に移動するなどというがわからない。翌朝、貨車は津浦線を北上しており、間もなく徳島の近くで敵機の機銃掃射を受けた。機関車は蒸気を噴出したので徳島站にて停車して機関車を交換する間、三年前に居住した兵舎に入る。

夕方乗車して一路天津へ進む。天津站を後にしたところで部隊長桑原少佐殿の訓話があり、北朝鮮方面に向かうとのことであった。京山線を北に山海関へ向かった。途中に塘沽、唐山、古沽、開平、北戴河等支那の戦線で三年半勤務したのが偲ばれ、感涙する。

七月二十一日の朝、山海関を通過する。錦州付近は水田が多く水稲を盛んに栽培しているのを見て、内地を思い出した。

三年半前、華北へ向かったときと逆の方向へと行進した。奉天、本溪湖を経て安東に至る。列車は轟音をたてて、鴨緑江を渡った。

七月二十二日の朝であった。京城で兵站給与となり、

しばらく停車して午後出発、議政府、鉄原、元山で夜となり、七月二十三日、日本海側の興南に着く。ここは、工業地帯で、重工業、化学肥料、マッチとろろろくに至るまで製造していた。

七月二十四日、威鏡南道威興府に到着、積載物を下ろして各中隊ごとに監視者を出した。あとは洲西国民学校へと行進し、国民学校が兵舎となった。

ここでは、鉄の場合、木の場合と岩石の場合の爆薬の葉量計算と、架橋の演習と築城が毎日行われた。

私たちの小隊は朝陽面という部落に駐留しているときに終戦となり、日本敗戦を中隊本部の伝令により知った。

八月十五日に天皇陛下の命令で陸海軍は戦闘をやめ、敗戦となったことを十六日に知らされた。

築城を直ちに中止して、その日のうちに中隊に帰隊すると、中隊内では大混乱であった。中には戦闘を続行し不可侵条約を破ったソビエト軍と戦うと言う者もいた。けれども天皇陛下の命令なので武装解除を受けた。

その後は元の朝陽面の小学校に收容された。ときどき検査があり、万年筆や時計を没収された。でもそのときは食糧は十分にあつたので困ることはなかった。

十月一日、急にソビエト軍の命令で装具を持って全員集合せよと命令が出た。

指揮官の言葉では東京へ帰ると言っていたが、興南港に着いてみるとソビエトの汽船があるので東京行きは嘘だと気づいた。

十月七日ころ、乗船し出発した。朝鮮の民家が左に見えるのでウラジオストックに向かっているのに気づく。

十月十日ウラジオストック港に着き、翌日上陸して第十收容所に入る。

そのとき、平野中隊は千名くらいであった。余り大きくない建物に千名をすし詰めにしたので、ちょっと起きるともう寝られないほどでした。

翌日から穴掘りをし、それは大きな便所となった。角材を渡したただけのものである。水道工事などをしていくうちに、初年兵一人が病名はわからないが死亡し

た。名前はわからないが埼玉出身と聞く。

私は当時四年兵でした。十月も中旬になると寒くて、ウラジオストックはまだ雪は降らなかつたが寒かつた。

十一月十日、新たに編成された五十九師団通信隊の林少尉殿の指揮によりセミヨノフカへ伐採作業のために移動することになり、丸一日がかりで現地に着く。

全員が装具を解いて寝台に落ちつくと同時に床が落ちしたので数名が負傷した。

当日は食事なしの一日でしたが、翌日は二分分の食事なので大いに満腹したが、このようなことはシベリアにいた間一回だけであつた。負傷者を除く全員が零下三十度の森林の伐採作業と運搬、雪は八十センチくらい積もり苦しい作業であつたが、一つの楽しみは大きな松かさを集めて持ち帰りベチカで松脂を焼き取り、皆で分けて食べた。これが一番の楽しみであつた。

毎日の雪中の作業は苦痛であつた。食糧不足と重労働と飢餓と寒さで死線をさまよつた。

ある日、伐採作業中、松の木の上部に大きな枝が片方であり、切り終わると同時に自分のいる方向にねじ

れて倒れかかつたが、雪が深くて逃げ遅れて圧死した初年兵がいた。山形県出身だと聞いたが、名前はわからない。

零下三十度の雪中の伐採は、二人で引く鋸で切り倒すのであるが、真実重労働でした。

一日の食事は、黒パンは三百グラム、雑炊は米、数の子、魚で飯盒に半分くらいでした。

毎日、夕方の点呼の時間が長いのは困つた。

夜は丸太小屋なので丸太の間から南京虫、それにシラムの襲撃にあい眠れないほどでした。

電気はないが、ランプとベチカの明かりで夜をすごす。室内は暖かくよかつた。

ここの收容所長はノビューフという少尉だと思ひます。

昭和二十一年二月中旬に疲れから私は三十八度五分の熱を出し、ソビエト軍の女医さんの命令でスパーチと言われたので寝ることができた。

一週間たつても熱は下がらず、岩手県出身だと聞いた軍医中尉影山殿に大分お世話になつた。

それから熱が下がったが、女医さんの命令で作業免除となり収容所内の軽い作業、掃除などをした。

収容所では病人が多くなつた。神経痛などは熱が出ないので痛んでも作業に引き出された。そのような友を見ると申しわけなく感じた。給与は少しはよくなつたが、それでも友のパンを盗む者が出た。それで制裁を受ける者、食物でけんかする者がいた。

ある日、炊事班長の「俺の言うこと聞かなければ飯はつぐらない」の一言で争いもやんだ。

風呂に入れないので疥癬では全員が苦勞した。

昭和二十一年四月中旬ころ、私を始め八人がアルチョムの病院に入院することになり、私が先任者として収容所を出発した。約二十日くらい入院し、六人で退院したところが元のウラジオストックの第十収容所平野伝吉大尉殿の収容所であつた。

私たち六人は作業はなかつた。

五月二十九日夜、第十収容所の軍医の木村大尉殿に呼ばれて、三十日ウラジオストック港より北朝鮮の方面に行くらしいと言われた。三十日の朝、平野大尉殿

以下幹部に申告して先任者としてトラックに乗り港に行くといふと人員点呼後ただちに乗船した。

朝鮮感鏡北道清津港に六月三日の朝接岸した。しかし食事がなく、各人が非常のときのため米は持つていたが、飯盒炊飯ができないので生米をかじるような状態でした。

五日になつて、貨車に乗車して、また北上して着いたところは古茂山駅であつた。

私たち約五百名ぐらいが下車して日本の小野田セメント工場の寮に各班ごとに入る。

翌日よりソ連兵に監視されながらの作業であつたが、朝鮮に来てからは苦しくはなかつた。

ある日、順番がきた。それは小野田セメント工場へ使役として行くので、指揮者を四年兵以上兵長から選ぶといふことでした。

私は二百名の指揮者として工場へ行く途中、ソ連兵により機械の故障で作業はきょうは中止との命令を受けた。やれやれと思つた。

七月十日ごろ、左の首筋が腫れたが、移動で診察を

受けられなかった。古茂山に戻ってから腫れがひどく
なったので古茂山の診療所に入院した。早速手術をし
てもらいました。

二週間くらいで退院して、もとの寮に戻った。

八月十四日また移動、古茂山駅で貨車にすし詰め
され、感鏡南道興南に向かう。

興南では軽作業で毎日を過ごした。十二月に入って
から帰国できるかもしれないとソ連兵が漏らした。間
もなく十二月十二日になって帰国の準備をするよう命
令が出た。

食事はよく、風呂にも入り、準備はできた。十五日
の午後、帰国のために収容所を出る。興南の港に着く
と日の丸が船尾に掲揚されているのを見て感涙にむせ
んだ。

直ちに乗船した。船名は永祿丸といい、七千二百ト
ンくらいの船であった。太平洋戦争でよく生き残った
船と思いき感激した。

十六日朝出航した。間もなく皆、甲板に登り北朝鮮
興南の工場を見おさめる。

船の行先は船員に聞いてみると佐世保港へという返
事であったので、日本国が見えるような感がした。

十八日の昼ごろ、佐世保港外に停泊した。十九日、
佐世保港内に小船で入ると日本海軍の艦船が半分沈ん
だままの残骸をさらしており、爆撃の跡もところどこ
ろに見られた。

しかし佐世保の山々は戦いに敗れて帰ってきた将兵
の心を癒すかのように緑深く美しく見えた。

針尾島の浦東検疫所でDDTの検疫を受け真っ白に
なる。それから南風崎の元海軍の兵舎に集合した。約
千名の人員であった。所属部隊や派遣先やシベリアの
どこで強制労働をしたかなどの調査があった。

終戦のときの階級は兵長であったのでそのとおり申
告し、帰郷の準備に追われていた。

所属部隊名の始めは北支派遣衣第四二九八部隊平野
中隊で、それから北朝鮮に移動して威興と興南地区の
警備中に終戦となり、ソ連軍の俘虜となり、シベリア
にて強制労働に服した。

私の郷里は茨城県鹿島郡波崎町であるが、近い駅は

千葉県銚子駅なので銚子までの切符をもらった。

十二月二十六日、南風崎駅をあとに、貨車はすし詰めであるが、東京品川駅に着いたら夜になった。

二十七日、千葉の戦友とともに千葉駅で下車し、千葉寒川に親戚があるからと戦友鈴木一さんと一緒に行って二泊した。

食糧不足の折りにもかかわらず大御馳走になり、鈴木さんとともにシベリアの苦勞話をした。

家へは電報を出したので、二十九日午後三時ころ銚子駅に着くと親戚や弟妹が迎えに来ていた。

親戚の方に駅前であいさつをして別れ、母親と弟妹とともに渡し船により波崎町に着いた。

渡し船場に父親が迎えにきていた。午後四時ころ懐かしい我が家に帰宅し復員となった。昭和二十一年十二月二十九日で軍隊生活を終わる。

【執筆者の紹介】

現住所 茨城県鹿島郡波崎町九三八〇

本籍地 茨城県鹿島郡波崎町九三八〇

生年月日 大正十年二月二十一日

入 隊 昭和十七年三月一日

最終所属部隊 北支派遣衣第四二九八部隊第一中隊

終戦時の居住地 北朝鮮咸興郊外

入ソ日 昭和二十年九月二十五日

抑留地 ウラジオストック セミヨノフカ

作 業 伐採

引 揚 昭和二十一年十二月二十九日

引揚船 永祿丸

上陸地 佐世保

(茨城県 府馬 正治)

ヤ・ポンスキー

石川県 大坂 喜久治

黄塵にまみれて

昭和十八年一月、現役兵として金沢から遠く満州国

北安省チチハルに送られ、砲兵隊に入隊して一年後、